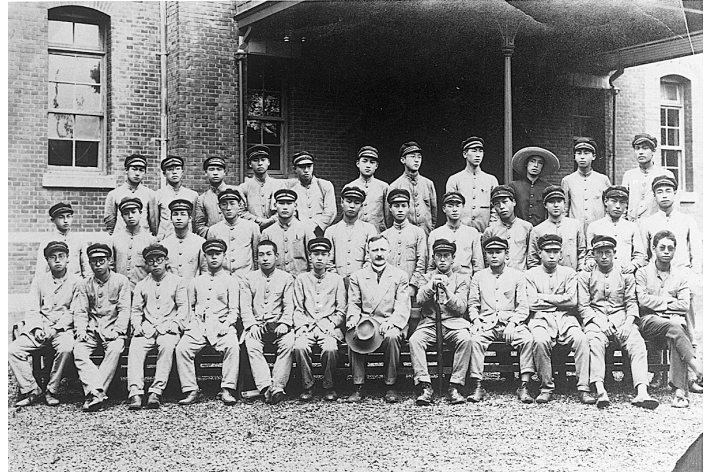


金沢大学資料館だより

No.27 Mar.10.2006



ヴォールファルト先生送別記念写真 1921年7月

—目次—

四高のドイツ人教師ヴォールファルトと中野重治 平成17年度金沢大学資料館特別展	…2
金沢大学資料館公開講演会について	…4
史料紹介『時務説』前田土佐守家資料館所蔵	…5
資料館彙報	…8

昨春、資料館に一人のドイツ人女性の訪問者があった。モーニカ・ライヒ＝ヴォールファルトさんといい、かつて四高で20年にわたってドイツ語を教えられたエルンスト・ヴォールファルト Ernst Wohlfarth 先生の孫娘さんに当る。先生のご長男、つまりモーニカさんのお父さんは金沢で生まれ、同じエルンストという名だが、別に金太郎という日本人名ももらって、四高生たちを喜ばせた。この金太郎氏はドイツで高等教育を受けたあと外交官となり、戦時中再び来日して、神戸の総領事館で副領事をされていた。モーニカさんは、国際ドイツ年の機会に、幼き日々を過ごした懐かしい神戸に招待されて来日され、金沢へも一日足を延ばされたというわけである。お祖父さんを偲ぶよすがを求めての金沢大学訪問だった。資料館に保管されている契約書の先生自筆サインなどをカメラに収めて帰られたという。

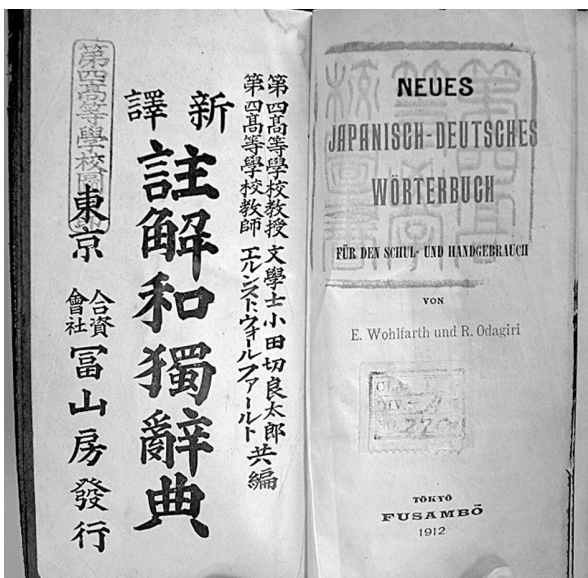
ヴォールファルトという名を耳にしても思い当たる人はそういないだろうが、日本で最



モーニカ・ライヒ＝ヴォールファルトさん

初の本格的な和独辞典の共編者としてもその名をとどめている（小田切良太郎，E・ヴォールファルト共編『新譯注解和獨辞典』1912年，富山房）。履歴書に見るかぎり，教員養成学校を出て，小学校教員になり，とくに言語の専門家というのではないから，ドイツ語のネイティブとして，四高同僚の小田切氏に請われて協力されたものであろう。7年に及ぶ熱心な共同作業の末に辞典は完成した。高等学校の生徒たちに使ってもらうことが何よりも目標だったにちがいない。現在金大図書館にも2冊残っている。中国の地名をドイツ語表記した一覧表が付いているところなど今となっては珍しく，ドイツが中国に植民地を領有していた当時の時代相をとどめている。私個人としても，ローザ・ルクセンブルクの文でいくら調べても分らなかった中国の都市名が，そのおかげで特定できた思い出がある。

私が最初にその名を知ったのは，中野重治のエッセイでのことである。ヴォールファルトというのは「福祉」というような意味の普通名詞に由来するから，「先生の名前は変じゃないですか」と面と向かって言う生徒もいたらしい。中野は1919（大正8）年四高に入学，二度落第して，1924年春卒業した。この頃の



小田切良太郎，E・ヴォールファルト共編『新譯注解和獨辞典』1912年刊，中扉（金大図書館蔵）

高等学校は帝国大学の予備課程という性格が強く、とりわけ外国語の学習に重きが置かれていた。彼が入学した文科乙類はドイツ語を中心としたクラスで、一週間にドイツ語が11時間もあり、英語も8時間あった。中野はヴォールファルト先生から、1921年夏にドイツに帰国されるまでずっとドイツ語会話を習った。卒業後は、帝大のドイツ文学科に進み、とりわけハイネと親しんだ。この学生時代には国際労働者救援会の組織づくりにやって来たドイツ人のために通訳まがいのこともしたというから、このあたりになると、かなり先生の恩恵を被っているようだ。彼の蔵書は福井県の丸岡町民図書館に納められており、アト・ランダムに抜き出すと、余白にドイツ語の書込みのある本に結構お目にかかる。残された四高での成績表から見れば、さほど出来がよかったとは言えそうもなく、自分でも自信なげな言葉を洩らしているが、ドイツ語への愛着は強かったようだ。「たいへん善良な人で、いい生徒からも悪い生徒からも親しまれていた」とヴォールファルト先生について中野は書いているが、ひとつには注意点なんかを滅多につけぬというためでもあったとそこに書き添えているところなど微笑ましい。だが、ほんとうにみんなに親しまれていたことは、いよいよドイツへ帰国されることになったとき、誰が音頭を取るというのでなく、先生からドイツ語を教わった在校生400人が集まって、市の公会堂で送別会が開かれたことにもうかがえる。

中野のエッセイは「先生の息子」（『中野重治全集』第26巻所収）という表題である。たまたま手にした新聞に、金太郎氏が副領事に着任したことを伝える記事が出ていて、20年前の記憶が甦り、それが機縁になって書かれたようだ。草原に腹ばいになって級友とと

めどないおしゃべりをしていると、少し離れたところを睦まじそうに話しながら先生の一家が通りかかる。すると子供が何かで駄々をこねている様子と見え、先生が力をこめて説教しているふうである。やがて手を振上げ子供の尻をぶつ先生を見る。「この光景は、ふたりの怠けものの生徒に心にしみて受けとられた。それは教壇の先生ではなかった。」と中野は書いている。「心にしみて受けとられた」のは、ひたすら異国人として接していた先生が見せた思いがけぬ普通の父親としての姿だったろうか、それとも教壇でと同じく何事にも真剣に対処する先生の姿だったろうか。いずれにせよ、これがエッセイのいわば原風景である。先生をいっそう身近に感じたのだろう、おしゃべり仲間の二人は、送別会の後、先生を自宅に訪ねる。帰り際に、級友が彼の妹手づくりのきれいに彩色した麦わらの小箱を、中野のほうは、「大胆というか不敵というか」と自分で書いているが、スケッチ板に描いた油絵自画像を贈り物としてさしだした。すると先生は「いつかおまえがベルリンへ来るならば、おまえはこれを、ふたたび私の書斎に見出すであろう。」というようなことを言われた、とある。

エッセイのきっかけは金太郎氏の副領事着任の記事だったろうと書いたが、そしてやはりそうにちがいないが、中野はその2年前に彼の代表作とも言える小説「歌のわかれ」を書き、自らの金沢四高時代をその材料にしていた。だから、彼の頭の中には若き日のあれやこれやの思い出がそうでなくともひしめいていただろう。そう言えば、すでにこの作中にヴォールファルト先生らしきドイツ人教師がヴォルフという名で顔を出すところがある。いかにも見え見えの命名ではある。読む側から言えば、どんな名前であろうが関係ないよ

うなものだが、記憶をそのまま生かして書くことの多いこの作家の執筆風景がちらと覗けて見えるようで、これはこれで面白い。エッセイは、子供の尻をぶつ先生の姿を核に、もうひとつ、尻をぶたれていた子供が成長して外交官として姿を現したのに驚いた、時の経過への思いがそこにからまっている。

中野は「その後何年間かは気になって仕方なかったあの汚い絵のことも、もう気にもなくなってしまう。」と書いているが、絵はどうなったのだろうか。先生にしても、書

齋で額縁の中から自分を見つめている日本の教え子がその後ハイネについての本を書き、さらに小説を書いて、その中に自分らしい人間が登場するなどとは思いつかべることなかっただろう。中野が初めてドイツを訪れたのは1965年のことで、この年5月ベルリンとワイマルで国際作家集会が行われ、それに参加するためであった。しかし、知るや知らずや、先生はすでに1956年に亡くなられていて、中野がその書齋にふたたび絵を見出すことはなかった。

●写真説明

表紙写真：「ヴォールファルト先生送別記念写真 1921年7月 四高正面玄関前」
前列中央ヴォールファルト先生、右端中野重治（中野重治夫人原泉さん提供）

平成17年度金沢大学資料館特別展「科学技術史研究の卵たち」 金沢大学資料館公開講演会「保存された四高物理機器」について

金沢大学資料館では特別展「科学技術史研究の卵たち」を、平成17年10月31日から11月11日まで資料館展示室で開催した。来館者数285人。

図書は保存されるが、実験機器は保存されることが少ないのが現状である。そのような中で四高物理機器が移転という危機を何度も乗り越え現存しているのは、保存しようとする強い意志が働いていたからに他ならない。

この四高物理機器は百年以上保存され、すでに「科学技術史資料」と言っていってよいであろう。しかし、今年度小立野キャンパスから角間キャンパスに移転してきた工学部の実験機器等はまだその年数には至ってはいない。これから保存していくことで「科学技術史資料」になる卵たちである。今回はこれら四高物理機器と工学部の実験機器を中心に展示をした。

またこの他、洋学の導入に伴い幕末の藩校において自然科学教育に使用された書物、実験機器を使用していた工学部の前身校金沢高等工業学校関連資料も合わせて展示した。

今回の特別展はテレビや新聞に取り上げられたことで、多くの入場者があった。

公開講演会「保存された四高物理機器」は特別展期間中の11月9日、本学名誉教授竹村松男氏が中央図書館 AV 室にて講演を行った。来聴者数33人。

講演内容は四高物理機器の保存に尽力された、竹村先生が、先人の跡をついでどのように保存してきたかを丁寧に講義され、講演者と聴衆が一体となるなごやかな雰囲気での講演会であった。

この講演要旨は『金沢大学資料館紀要No.4』に掲載する。
(資料館 田嶋)



史料紹介

「時務説」 前田土佐守家資料館所蔵

金沢大学大学院修士 近藤 真史

金沢大学資料館所蔵資料、経武館の扁額の題字を書いたのは加賀藩八家前田土佐守家六代当主前田直方である。今回はその前田直方の著述である「時務説」を紹介する。

前田直方（以下直方）は寛延元年（1748）閏10月生まれ、安永3年（1774）26歳で家督を継ぐと、年寄に任じられる。翌年には藩財政の最高責任者である勝手方主付に任じられる。同年中にいったん勝手方主付を免じられるが、同七年には藩主の参勤交代の留守中の臨時として、その翌年、同8年にはもう一度正式に勝手方主付に任じられる。また、安永六年には従五位下土佐守に就任している。しかし、直方は寛政元年（1789）に月番・加判、勝手方主付を免じられ、朔望・佳節のみ登城することとされ、藩政から完全に遠ざけられた。その後、文化3年（1806）に年寄復帰、文化7年に勝手方主付に再任される。もう一人の勝手方主付である本多政養と共に疲弊した加賀藩財政を立て直すために改作法復古政策等を行うが、短命に終り文化9年に勝手方主付に辞職し隠居する。その後は藩政に戻る事は無く、文政6年（1823）に76歳で没した。経歴からもわかるように前田直方は若い頃から藩政の中心での活躍を期待され、重責を果たしていったといえよう。

直方は経歴にあるような前田家の重臣としての側面だけではない別の姿がある。前田土佐守家資料館には直方の手による大量の書付が残されている。それらの大部分は折紙や袋綴のものである。内容も雑駁で、政治の事はもちろん、武士としての生き方、時事批判といったものである。全体的に仮名まじりの和文体であり、変体仮名が多く使われているの

が特徴的である。最初に政治に遠ざかる寛政期以降から断続的に残されていて、特に文化期以降、直方が老年にさしかかる頃のもの大部分を占める。おそらく、藩政に参加できない自身のありあまる時間を著述によって埋めていたのではないかと考えられる。

寛政11年には今回紹介する「時務説」を著述する。「時務説」は直方の著述として最初のものである。29枚のものを1部として袋綴になっており、全部で7部ある。時期的にも8月から9月に集中して著述しており、直方の強い意思を感じられる。内容は1部が主に加越能三州の治世の事、2部が農政、加賀藩独自の仕法である改作方などについて、3部が財用について、4部が政治批判、5部が軍政について、6部が政務にあたっての為政者としての心構え、7部が道徳的な日々の心構え等である。全体として、我が身のために著述しているというよりは誰かに読まれることを意識しているような文体であるが、誰宛なのかははっきりしない。ただ、内容から平民や下士層にむけてのものではなく、藩政主導部、特に藩主に向けて著述されたものではないかとは推測される。今回は「時務説」の一部を紹介し、当時の藩政首脳部の一人であった直方が時勢に対してどのような意見をもっていたかを紹介したい。

直方は藩政について「三州全ク御領と相成候も二百年に及申候其間御政務の事御條目の義は瑞龍院様御條目有之外ハ見及候品も無御座候」と二代前田利長（瑞龍院）が定めた条目以外については藩政について定められた条目は無いとしている。その後の慶長から4、50年ばかりは、前田家の伝記や、家臣達の書

き伝えによって伝わっており、詳しい状況がわかるとする。直方が重要な事と考えるのは「其時々之依被仰出御政務之御意味時風翫好の品までも当時ニ而も覚知可仕事に候半軟」と、時々によって行われる政治の意味を当時の風俗、流行と言った時勢の背景を考慮して知るべきことだとする。同じように「此百四五拾年之間之御政務の初る所、時勢風俗之論し尽すべき事こそ專要候半軟。論し尽くし迄に此事を手本とするは己れなくにては御政務之根に帰へるといふ事そ候まし」と今までの百四五十年間の政治について回顧するためには、まず当時の時勢風俗を議論しつくす事からはじまるのではないか。議論しくした上で、その根本と言うべき政務の髓というべきものを抽出する事が大事とする。つまり、直方にとって藩政とは過去の出来事を継承し、それをそのまま踏襲するのではなく、本質を捉えた上で、時代に合わせて変化させるべきもの、であった。

直方は「時務説」が書かれた寛政とそれ以前の時勢を比較し、「寛文已前は国初ゆえ幼年のこく寛文以後は壮年と申すにて候。享保より後は老のこく、其間御政務によつて御中興之御意味も有之候へとも、わつかの年間中にて、弥老と向ふるとも申へき御政事に相成候ハ時勢とも可申候。」と、寛文を境にそれ以前を幼年、寛文以後を壮年、享保からは老年とする。政治によって一旦は立ち直った時代もあったが、それもわずかな時代であり、段々と老いていくのは時勢であり仕方が無いものとする。もちろん。「時務説」の書かれた寛政当時も老年であり、直方の目からは当時の藩政は老人のように映っていたのだろう。

事実、藩の疲労は甚だしく、様々な改革が行われて打開策が図られよとするのがこの当時の加賀藩政である。一つは学校の建立である。藩は当時の惰弱していた士風を刷新する

ために寛政四年に文学校である明倫堂、翌年には経武館を建立する。藩は文武両道を兼ね揃えた武士の育成を試みるのである。だが、直方は「当時のことき学校をたてをかれ候而文武を励ませられとも一端にて学校無之已前も文武を励候事ハさまてかわりもあるましき候哉」と、学校を建立して文武を励ませても、それ以前と比べて効果が無いと懐疑的である。それはなぜかという、「文武忠孝を励し可正禮義事に候を武家諸法度之最初三ヶ條に有之候は、御代々之御実目に候。」と、武家諸法度によって文武忠孝に励む事は定められ、そして加賀藩もそれに従っている。つまり、学校をたてる以前から文武に励む事は当然の事であったと直方は考えている。そして、学校が無い時は学校さえ出来れば、皆が競争して文武に励むだろうと期待されていたが、いざ出来たからといって大して変わった事はないと直方はいう。むしろ「却而諸稽古所は励薄きやうにも可候成候」と逆効果になっていることを指摘する。ただし、直方は学問（儒学）を根底から否定しているということではなく、学校の効果が限定的だと指摘し批判しているのである。

また、当時の加賀藩財政は藩債が急激に増加し、天明期には金融の途絶など藩政の円滑な運営が困難になるなどの財政問題を抱えていた。そのため、加賀藩は収入の増強等を目指し、儉約などの支出削減策を取るなど財政改革を行おうとする時期である。直方も経歴にあるように「勝手方主付」といった財政面での最高責任者となっており、財政には強い関心を抱いており「時務説」にも記述がある。直方は財政と藩主との関わりについて「御財用之事に付思召通りに被為相候との義は、有之間敷義ニ御座候」と藩主による専制的なあり方はあるべきではないとし、「思召俣に万事相整候様にとの義は御小身の御大名方の義

二御座候半軟。三州之御手当と申時は夥敷御運方二而御座候半軟」と藩主専制による財政は小身の大名に限るものとし、加賀・能登・越中の三ヶ国を領し、百万石を有する大大名たる加賀藩ともなると財政面だけでも膨大になり、藩主専制ではやれないと言い、「諸役人詮議」を重要視する。ただし、家臣による詮議の限界も指摘しており、例えば家臣たちに儉約等を取り仕切らせると、婚礼や儀礼等、大大名たる加賀藩の藩主としての威光を示す際に無用の儉約を行う可能性があるとしている。直方にとって重要なのは大大名たる加賀藩と言う格なのであり、その威光を維持するための儀礼的な出費は当然とする。一方で儉約の重要性も承知しており「分限を越候奢侈之儀と吝嗇の物とは不存付事に御座候」、「御用弁し様に見候二至り候へハ万事相調候筈二御座候」と、バランスのよい出費のあり方を唱えている。

前述した通り当時の加賀藩では質素儉約が図られていた。直方にとって儉約とは「御省略と申義は冗官を差止」る事、つまり無駄な人員の削減を図る事であった。特に直方から見て剰員となっていたのは「学校之御役人」「小役人」「町方杯小役人」といった武士階層でも下層の者たちの存在であった。直方のいう小役人が具体的に何を指すのかはわからないが、少なくとも年寄等、自分達の階層が剰員であるとは思っていない事は確かである。あくまで、自分達以外の下の者達が主眼であった。そして、「省略と申て増而当時迄其しるし相見候品も無之候」と全体として加賀藩の質素儉約がうまくいっていないことを強く指摘する。

直方の視点は以上のような藩政だけでなく、当時の武士、家臣団全体にも及び、「治世久敷候得は肝要之武備之心得もうとく成行、驕吝謡逸之志のみにて、無容之所作多ク相成候

も、法度政務之致処二而御座候半軟」と、武士自体が本分である武備の心得が薄くなり、弛緩してしまっている事を指摘している。また、寛政年間にはラクスマン事件が起こるなど徐々に国内から国外へと目が向き始めていく時期でもある。直方も「近年公辺より被仰渡之、浦方御手当之義杯も、異国船之御手当二而可有之候ハ、中々小事二而は無之義二而、可有之候」と海防にも目を向けている。

以上、雑駁ながら「時務説」の内容をいくつか紹介してきた。この「時務説」に表れてくるのは当時の藩政の中心人物であった前田直方という人物の視点を通して現れる近世中期における加賀藩政の矛盾と、それに対する直方の危機感というべきものであろう。彼の前提にあるのは加賀藩と言う制度を引継ぎ、いかに次代へ渡していくかというものと思われる。そのために、彼はそれまでの加賀藩政の歴史を勉強し、それをそのまま踏襲するのではなく時勢に合わせた形で変化すべきであるといった意見を持ち、実際に行なわれている藩政改革に対して極めて厳しい視線で批判を加えていく。近世中期という様々な諸矛盾が顕在化していく中での、八家という加賀藩最上層部にいるものの強烈な責任感と自覚が表れており、直方の著述は当時の藩政を語る上で貴重な史料と考えられる。

最後に、今回このような場を提供してくださった金沢大学資料館と、史料の使用を快く許可して下さった金沢市立前田土佐守資料館に感謝の意を述べたい。

参考文献

田畑勉「寛政・享和期における加賀藩財政の構造について」『地方史研究』百十一号 1971
長山直治『寺島蔵人と加賀藩政 化政天保期の百万石群像』桂書房 2003

資料館彙報（平成17年7月～平成18年2月）

7月7日	工学部人間・機械工学科から「実験機器」移管	10月20日	富山県立大門高等学校生徒来館
7月13日	富山県立福岡高等学校, 福井県立羽水高等学校, 遊学館高等学校生徒来館	10月25日	石川県立小松高等学校 PTA 来館
7月19日	工学部事務部から「文書資料」, 電気電子システム工学科から「実験機器」, 機能機械工学科から「結晶模型」, 土木建設工学科から「橋梁模型」等移管	10月26日	施設管理部施設運営維持課から「城内歩兵百七連隊建物平面図」移管
8月9, 10日	オープンキャンパス 高校生が展示室を見学	10月26日	石川県立二水高等学校生徒来館
8月24, 25日	子供見学デー 小・中学生が展示室を見学	10月28日	石川県立桜丘高等学校生徒来館
8月26日	工学部非常勤講師安達實先生から「計算尺」寄贈	10月31日	平成17年度金沢大学資料館特別展「科学技術史研究の卵たち」開催（11月11日まで）来館者数285人
9月12日	医学部旧書庫から「文書資料」移管	11月7日	第四高等学校卒業生井上友一氏令孫井上友幸氏来館
9月14日	医学部事務部から「金沢医科大学時代の教示図」移管	11月9日	平成17年度金沢大学資料館公開講演会「保存された四高物理機器」本学名誉教授竹村松男氏講演。来聴者数33人
9月28日	工学部事務部から「旧講堂シャンデリア」, 人間・機械工学科から「万能測長器等機器」等移管	11月11日	「日本教育史」受講生来館
9月30日	大阪大学文学部竹中亨氏, 大阪大学出版会大西愛氏来館	11月14日	富山県立伏木高等学校生徒来館
10月3日	石川県立美術館「朝鮮のやきもの」展（10月27日～12月28日）に暁烏陶磁器コレクション朝鮮陶磁器を貸出	11月16日	北陸大谷高等学校生徒来館
10月5日	石川県立大聖寺高等学校 PTA 来館	11月15日	総務部総務課から「創立50周年焼印」, 「升」移管
10月13日	富山県立福野高等学校 PTA 来館	11月16日	総務部総務課から「第Ⅱ期起工式ポスター（平成四年）」移管
10月14日	富山県立福岡高等学校 PTA 来館	11月21日	学生部学生募集課から「文書資料」移管
10月17日	富山県立魚津高等学校 PTA 来館	11月25日	教育学部総務係から「文書資料」移管
	金沢高等工業学校 OB 横山成章氏令息 紘一氏から「金沢高等工業学校応用化学第8回卒業記念アルバム」寄贈	12月27日	「博物館資料論」（集中講義）受講生来館
10月19日	群馬県立富岡高等学校生徒来館	1月16日	会計検査院遠藤隆志氏来館
		2月1日	経済学部徳久寧一氏から「前身校等写真」寄贈
		2月2日	江戸東京博物館「江戸の学び—教育爆発の時代—」展（2月18日～3月26日）に「明倫堂」を貸出
		2月14日	がん研究所から「結核研究所所蔵絵画」移管

金沢大学資料館だより 第27号

館長 田中 重徳（医学部教授）

館員 在田 則子（平成17年12月まで）

館員 田嶋万希子

〒920-1192 金沢市角間町（附属図書館内）

金沢大学資料館

Tel (076)264-5215 Fax (076)234-4051

E-mail museum@ad.kanazawa-u.ac.jp

発行日 平成18年3月10日

編集発行 金沢大学資料館

ホームページ URL

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryo/index.html>